

平成二十四年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

II 国語

注意事項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は問四まであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 3 答えは、解答用紙の決められた欄らんに書き入れなさい。
- 4 終了の合図があつたら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号

番

問一 次の問い合わせに答えなさい。

(ア) 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代かなづかいで書きなさい。

見事な演技に賛嘆の声がもれる。

ペンキを壁一面に塗布する。

既刊の書籍から資料を探す。

相手の気持ちを推し量る。

(イ) 次の各文中の——線をつけたカタカナを、漢字に直しなさい。(楷書で大きく、ていねいに書きなさい。)

雲一つないカイセイの日に遠足に行く。

川が隣町とのキヨウカイになつていている。

費用を参加者で均等にフタンする。

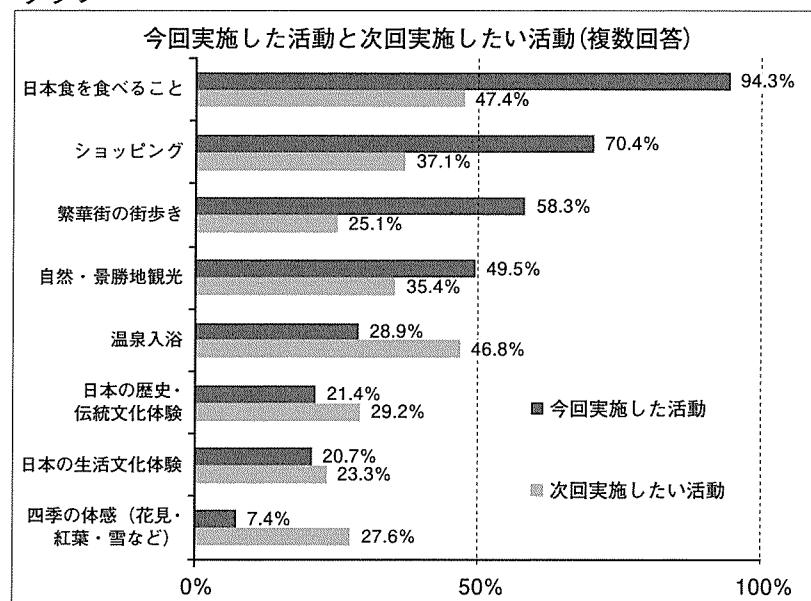
渡り鳥のムレが北へ旅立っていく。

(ウ) 次の文章とグラフは、中学生のAさんが、総合的な学習の時間に外国人から見た日本について調査した内容をもとに、保護者や地域の方も招いて発表するために作成した原稿とそのときに使うグラフである。これらについて、あとの(i)～(iii)の問い合わせに答えなさい。(①～④は段落番号。)

① 最近、駅や街中で案内板に書かれたさまざまな外国語をよく見かけます。外国人観光客が増えており、平成二十二年には約八百六十万人が日本を訪れていると聞いて、私は、外国の方が日本滞在中に何をしたかを調べました。そして、それをもとに外国の方が日本の何に関心を持つて訪れ、何に魅力を感じているのかを考えることで、私自身が日本を見直してみようと思いました。

② グラフは、日本を訪れた外国の方が日本を出国する際に、空港で行つた聞き取り調査の結果をもとに作成したものです。「今回実施した活動」では、多方から「日本食を食べること」、「ショッピング」、「繁華街の街歩き」、「自然・景勝地観光」となっています。また、「次回実施したい活動」を見ると、「温泉入浴」、「日本の歴史・伝統文化体験」、「日本の生活文化体験」、「四季の体感」が「今回実施した活動」を上回るようになっていることがご理解いただけます。さらに、別の資料によれば、これら「次回実施したい活動」の項目の多くは、実際に実施した場合の満足度も高いそうです。

グラフ



観光庁「訪日外国人の消費動向」(平成23年4-6月期報告書)により作成。

③ ここからは、外国の方の多くが日本の文化の一端に触れ、現地でしか味わえない日本の魅力を感じたことをきっかけにして、次回はもっといろいろな体験をしてみたいと思うようになつていく傾

向を見てとることができます。たとえば、日本食を食べたり、有名な景勝地をまわつたりして、次回は春の桜や秋の紅葉も味わつてみたいというように、日本の気候や風土、歴史や文化などをより深く知りたいと思うようになつていくことが表れているように思うのです。

④ *ここまでお話しした*とおり、日本を訪れた外国の方の多くは、日本の気候や風土、歴史や文化などを魅力あるものとしてとらえていると思います。しかし、私たちは、身近にある自然や文化をどのくらい意識しているでしょうか。私は、この学習を通してそれらを見過ごしていたり、すでに身近なこととして感じられなくなつたりしていることが多いことに気付かされました。皆さんには、本日の資料をどのように拝見なさつたでしょうか。私たちも改めて日本の魅力についてより深く知ることが大切だと思います。この後、ぜひ皆さんからご意見をお寄せいただき、それを参考にしながら私たちが感じる日本の魅力について考えを深めていきたいと思つています。

- (i) *～線ア～工の中から、敬語の使い方が適切でないものを一つ選び、その記号を書きなさい。*
(ii) *本文の①～④の各段落の内容を説明したものとの組み合わせとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。*

- | | | | | |
|---|---------|----------------|---------|----------|
| 1 | ① 調査の動機 | ② グラフについての説明 | ③ 資料の分析 | ④ まとめ |
| 2 | ① 発表の要旨 | ② グラフと他の資料との比較 | ③ 自分の経験 | ④ まとめ |
| 3 | ① 調査の動機 | ② グラフと他の資料との比較 | ③ 資料の分析 | ④ 課題の再検討 |
| 4 | ① 発表の要旨 | ② グラフについての説明 | ③ 自分の経験 | ④ 課題の再検討 |
- (iii) *あるクラスの学級活動の中で、Aさんの発表の内容やグラフについて、生徒たちが話し合いを行つた。次の1～4は、そのときに出された意見の一部である。発表の内容やグラフから読み取れる内容として適切でないものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。*
- 1 「今回実施した活動」で『日本食を食べること』、『ショッピング』、『繁華街の街歩き』の割合が高くなつてゐるということは、外国の方の多くが、日本食や日本での買い物、人が集まるにぎやかな街の中を歩くことに高い関心を向けているんだね。」
- 2 「花見・紅葉・雪などの『四季の体感』は、その季節に日本を訪れてはじめて実感できる日本の魅力の一つなので、外国の方は今回の訪問でその魅力に触れて季節への関心が高まつた結果、『次回実施したい活動』の割合が大きく伸びたんだね。」
- 3 「日本食を食べること」の割合が『今回実施した活動』ではとても高かつたのに、『次回実施したい活動』では大きく減つてゐるのは、日本の食文化から日本らしさが失われつつあるために、繰り返し食への関心を持つてもらうことが難しいからなんだね。」
- 4 「外国の方の関心が、今回の訪問をきっかけに日本の自然や文化などをより深く知る方向に移つていく傾向を読み取ることができることと、それを実際に実施すると満足度も高いということを聞いて、私たちも日本の魅力に気付かされることが多かつたね。」

問二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

高校三年生の「ぼく（松本）」は、同じクラスの「岡崎聰美」に好意を持っていた。また、「ぼく」の友人の「樋口修造」は、「ぼく」の幼なじみの「野嶋民代」に好意を持つていた。「樋口」の代わりに「民代」の気持ちを聞くため、「ぼく」は公園で「民代」と待ち合わせをした。

「樋口修造は知ってるよね。」

「うん、前に同じクラスになつたことがある。」

そうだろう。うちの学校の女子生徒で彼を知らなければもぐりだ。

「樋口とは知り合いなんだけど、彼のことどう思う？」ぼくは少し誇らしげに言つたと思う。

「どうつて？」

「だからさ、かつこいいつて思うだろ？」

ぼくが言うと、民代はなぜか怪訝(注)けげんそうな顔をした。でもそれは子どもじみた照れのポーズなのだと受け取つた。

「じつはさ、樋口がきみのこと、気になつてるみたいなんだ。」

ぼくは民代の喜ぶ顔——これまで生きてきてよかつた、という顔——を期待した。

しかし民代はさらに顔をゆがめ、その口から思いがけない言葉を吐いた。

「わたし、あんなキザな男、嫌い。」

「なに言つてるんだよ。樋口修造だぞ。彼と付き合いたい女の子はごまんといる。知つてるだろ？」

こいつは照れているだけだと思い、そう言つて笑いかけた。

「知らない。」

「そんなんばかな。」¹

ぼくは混乱しつつも言葉を探した。「樋口は見ようによつては、そうだな、ちょっとキザに見えるかもしれない。ほんの少しね。でもとても性格はいいんだ。その証拠に、ぼくんかとも付き合つてくれてる。」

「やだ、あんな人。」

「ねえ、ちょっと待てよ。これはきみにとつてさ、すごいチャンスだと思つんだよね。こんな言い方失礼かもしれないけど、ぼくがきみの立場だつたら、絶対に逃がさないと思つんだ。樋口と付き合へば、野嶋の株だつてぐんと上がるはずさ。」

ぼくは□話したつもりだ。樋口も変わつていると思つたが、民代もまた彼以上に変わつていた。

「松本。」

「なに？」

「そんなにかつこよくて人気のある人と、わたしがうまくいくと思う？」

民代は子どものように下唇を噛んだ。いつのまにか民代の頬は紅潮していた。それは恥じらいなのか、あるいは怒りなのかさえ、ぼくには見当がつかなかつた。

「じゃあ、きみはどういう男がいひつて言うわけ？」

ぼくの問いかけに民代は沈黙でこたえた。眉の根にしわが寄つていた。民代は自問し、苦悶(注)くもんしているようだつた。

民代に自信がないことはわかつていて。だからできるだけぼくは褒めた。褒めすぎたくらいだ。だが、どうやらまちがいを犯したらしい。おそらく民代にも自尊心という柔らかな塊がどこかにあって、それをぼくがうつかり傷つけてしまったのだ。そのときはそう思った。

² 民代はなにも言わずに歩き出した。お参りの人が鈴を鳴らすために揺すつたように、後ろで編んだ髪の東が左右に大きく揺れていた。

そういうえば小さい頃、この公園で民代と遊んだことを思い出した。性別など一切意識せずに一緒にかけっこをしたり、ブランコに乗つたりした。民代の後ろ姿を眺めていると、ずいぶんと女らしくなつていた。それはそうだろう。昔遊んだ公園が、こんなにも小さく見えるのだから。

ぼくは樋口に合わせる顔がなかつたけれど、彼の家へとりあえず自転車に向かつた。到着するなり「どうだつた？」と訊かれたので、正直に話すことにして。「現状では、野嶋はきみに興味はなさそうだ。」と。³

「やつぱりそうか。」

樋口は親指の爪を噛んだ。

「きっと混乱してるんだと思うよ。」

「混乱？」

「そう。彼女はさ、今までだれかにいいとか、付き合いたいとか、言われたことがないんだ。だから混乱してるんだ。つまり正しい判断ができないんだよ。」

「それはどうかな？」樋口は冷めた口調で言った。「松本君はさ、たしかに野嶋さんのことによく知つているんだと思うよ。でもそれはかなり以前の彼女についてであつて、今の彼女ではない気がする。おれは今のがまつたく知らないわけじゃない。一年のときに同じクラスだつたからね。」

「そうだつたね。」とぼくは認めた。

「ある日、おれが放課後ギターを弾いていたときのことさ。野嶋さんが教室に入つてきたんだ。おそらく忘れ物でもしたんだろう。そのときちょっと話がしたくなつて、野嶋さんに声をかけたんだ。『今のぼくの歌、何点？』って。そしたら彼女、『四十六点。』って即答してさ。」

「あいつ……。」ばかが、と思った。

「それでさ、その根拠を知りたくて訊いたら、言わたんだ。『愛が足りない。』って。」「なに生意気なこと言つてるんだ。」

「そうじやないよ。おれ、その通りだなつて思つた。自分には、愛が足りないつて。それから野嶋さんはこう言つたんだ。『かつこ満点、中身は四十六点。』って。」

「普通言うか、そこまで？」ぼくは呆れてしまつた。

「だからこそ、おれは彼女に惹かれたんだと思う。おれには、彼女のようにはつきり欠点を指摘してくれる人が必要なんだよ。なんていうか、対等な立場でさ。彼女はね、外見で人を選んだりしない。中身がちゃんと見えてるんだ。本当はすごく温かい、そう、ココアみたいな女性だよ。だから、おれはあきらめない……。」

⁴ 樋口の言葉は熱を帯びていた。

それはいくらなんでも民代を買いかぶりすぎだと思った。でもそのことは黙つていた。

「外見なんて、人を好きになるきっかけに過ぎないよ。」樋口は、ぼくの心を見透かすように言つた。

「まだ時間はあるから、もう一度野嶋に話してみるよ。」ぼくは自分を鼓舞するように言つた。

「それがさ、時間はもうないんだよ。」

「え？」

「今日つて、十二月十八日だろ。じつはさ、おれの誕生日なんだ。今日の放課後、岡崎さんに告白された。」

ぼくはその言葉に愕然とした。ぼくが民代と会っているあいだに、そんなことが起きていたとは……。

「これ、もらつた。」

桶口は静かに言った。

桶口はカバンから薄いピンク色の封筒と、白い手編みのマフラーをだした。

「手紙、読んでみるか。」

こたえないでいると、黙つたまま封筒の中身を渡された。

ぼくは桶口に背中を向けると手紙を読んだ。それは、ぼくの好きな人が他人あてに書いたラブレターだつたけれど、ぼくが初めて読む本物のラブレターというものだつた。岡崎さんがきつと迷つた末に選んだであろう花びらをあしらつた便箋には、桶口君のことが一年生の頃から好きだつたと、淡いブルーのインクでつづられていた。

自分にとつて桶口君はとても遠い存在で夢みたいなものだから、付き合つてももらえないことはわかつている。それでも気持ちだけは伝えたかった。だからけじめとして返事はください、と結んでいた。

ぼくは便箋を元通りに折りたたむと、後ろ向きで桶口に渡しながら言つた。「返事、してやつたのか？」

「ああ。」

「なんて？」

「いつもと同じだよ。」

「そうか……。」

ぼくは壁紙に残つた蟻の巣よりも小さな画鋲の穴を見つめた。その穴には、なにか教訓でもあるような気がした。

「すまない——。」桶口はそう言つたけれど、それはちがうと思つた。

岡崎聰美はふられることを覚悟して桶口に告白したわけで、その気持ちは自分で抑えられないほど強かつたのだと思う。ぼくはそこまで彼女が好きだつたかと問われれば、正直自信がなかつた。

いつの頃からか、モテないぼくは消去法により自分に見合うような女の子を探すようになつていていた気がする。傲慢で、それこそ愛が足りなかつたのだと思う。臆病で、姑息で、打算的で、卑怯だつた。

「このマフラー、使うか？」桶口はなにげなく言つた。

ぼくの脳裏に教室で楽しげにマフラーを編む岡崎さんの姿が浮かんだ。白いマフラーは、とても手触りがよさそうだつたけれど、触れなかつた。⁵自分が触れてはいけない、と思った。一瞬痛みのような怒りが込み上げたが、じつとしているとすぐに収まつた。

「そろそろ帰るわ。」ぼくは普通に言うと、桶口の部屋を出た。

彼の誕生日を祝う言葉は、言い忘れてしまった。

(はらだ みずき 「ずっと忘れない」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 怪訝そうな＝事情がわからなくて不思議に思うような。

苦悶＝ひどく悩み苦しむこと。

姑息＝ここでは、自分をごまかして一時の間に合わせにすること。

(ア) 本文中の に入る語句として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 目の色を変えて 2 胸に手を当てて 3 腹を割つて 4 腰を折つて

(イ) 一線 1 「そんなばかな。」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 人気者の「樋口」と仲がいいことを自慢したのに、「民代」は驚くどころか「ぼく」を見下すような態度で応じたことが予想外で、怒りを覚えている。

2 「樋口」の思いを伝えたら「民代」が喜ぶと思つたのに、他の女子生徒に気を遣つて「樋口」のことを嫌いと言つたことが信じられず、戸惑つてている。

3 「樋口」にずっと思いを寄せていたはずの「民代」の口から、「樋口」のことなど嫌いだという意味の言葉が出たことが理解できず、衝撃を受けている。

4 女子生徒から人気の「樋口」からの好意を伝えたのに、「民代」が「樋口」をまるで受け入れようとしない態度を示したことが意外で、動搖している。

(ウ) 一線 2 「民代はなにも言わずに歩き出した。お参りの人鈴を鳴らすために揺すつたように、後ろ

で編んだ髪の束が左右に大きく揺れていた。」とあるが、このときの「民代」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「樋口」と付き合えることを喜ぶのが当然と決めつけて話す「ぼく」の態度に、自分の気持ちとは噛み合わないものを感じ、これ以上話を続けたくないと思っている。

2 人気者の「樋口」が自分に告白するはずがないので冗談だと思ったが、「ぼく」の必死な態度から本気だと知り、自分も真剣に考えなくてはいけないと思つていてる。

3 本人が直接に言わず、「ぼく」を通して告白してくる「樋口」のずる賢い策略に怒りがわいてくるとなり、幼なじみとしても「ぼく」も書きたくないと思つていてる。

4 「樋口」にはかり気を遣い自分自身のことは後回しにする「ぼく」の弱氣でふがいない態度が情けなくなり、幼なじみとしても「ぼく」も書きたくないと思つていてる。

一線 3 「やっぱりそうか。」とあるが、ここでの「樋口」の様子をふまえて、この部分を朗読すると、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「民代」の気持ちが自分に向いていないことを知つて残念に思いながらも、ある程度は予想してたその事実を受け入れようとしている様子をふまえて、声を抑えて読む。

2 「民代」にはその気がないということをはつきり伝えられ、予想どおりの結果に納得して気持ちを切り替えようと努力している様子をふまえて、わざと明るい調子で読む。

3 「民代」が自分に興味がないことを知り、わかつてはいたもののそれを受け止めきれなくてどうしようもなく弱気になつてしまふ様子をふまえて、震えるような声で読む。

4 「民代」に嫌われたことを知つて落ちこみながらも、そんな自分の恥ずかしい姿を人前では見せられないと思つて懸命に隠そうとする様子をふまえて、強がるようになつて読む。

(オ)

——線4 「樋口の言葉は熱を帯びていた。」とあるが、ここでの「樋口」の様子を説明したものとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

1 人気者の自分を軽くあしらつた「民代」の態度への悔しさや、それでも彼女を好きになってしまった自分自身へのいらだちなど、たまっていた感情を一気に「ぼく」に吐き出している。

2 他の人と違つて自分と率直に向き合つてくれる存在である「民代」への思いとともに、自分自身が抱えていた思いを「ぼく」に語るうちに、心が高ぶつて力のこもつた口調になつていて。

3 「民代」と幼なじみの「ぼく」に対する対抗心から、自分が今この彼女をよく知つていていうことを強調しようとして知らず知らずむきになり、「ぼく」に激しく思いをぶつけている。

4 人間の中身をしつかりと認めてくれる「民代」のことを思うだけでもせつないのに、「ぼく」にその思いを明かさざるをえなくなつたので、その語り口に恥ずかしさがあふれている。

(カ) ——線5 「自分が触れてはいけない、と思った。」とあるが、「ぼく」がそう思った理由として最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「岡崎」から「樋口」へのラブレターを読んで、自分は「岡崎」を本当に好きだったのだと再認識し、マフラーに触れたら悲しみを抑えきれなくなつてしまふと思つたから。

2 「岡崎」が心を込めて編んだマフラーは、自分ではなくあくまでも「樋口」のものであり、それに触れないでいることが「樋口」の立場を尊重することになると思つたから。

3 「樋口」の人を思いやる優しさに触れたことで、自分はいさぎよく「岡崎」をあきらめようと決意すると同時に、一人の仲がうまくいくと願う気持ちになつたから。

4 「樋口」へのひたむきな思いが込められた「岡崎」のマフラーに対し、そこまで本気で彼女と向き合つていなかつた自分には、とてもそれに触れる資格がないと思つたから。

(キ) この文章について述べたものとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

1 会話の後に説明を加えることで心情理解を促し、登場人物それぞれが抱える心の弱さを浮き彫りにしながら、主人公が自信を取り戻していく様子を、二つの場面に分けて描いている。

2 短い会話や簡潔な文を多用しながら、登場人物それぞれの心の揺れを表しつつ、周囲とのやりとりを通して主人公が自分自身を見つめていく様子を、主人公自らの視点から描いている。

3 恋愛を通して友情の温かさや残酷さを表現しながら、主人公が恋よりも大切なものがあることを知つて成長する様子を、回想と現実の場面を交互に織り交ぜて、きめ細かく描いている。

4 複雑な人間関係の中で、他人の恋に心を惑わされ右往左往する登場人物に触れながら、主人公が自分の本当に思う相手を見つけていく様子を、会話を中心とした文体によつて描いている。

問三 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

伝統とは何なのでしょうか。

わたしはいつも、伝統とは、ある時代の、ある土地に生きる人びとが、目の前に現われた事物に対応し、なんらかの行動を起こそうとする際に、我知らず拋り所としてしまう事物であると話してきました。

言いあれば、人びとが日常生活の中での行動や思考の支えとも言うことが出来るかもしれません。人は、何らかの事物に対して行動をするとき、A物を考えるときに、自由に考えているようですが、必ずその身体や思考に浸み込んだ根拠を支えとしています。そして、その根拠は個人的に身に付けたもののように感じていますが、多分に当人が生まれた土地の文化に枠づけられたものなのです。

個々の社会の中で、人びとは実に多様なことをしています。伝統は、そうした幾多の文化項目の中で、高級だとされているものだけに支えられているのではありません。むしろ、ごく普通の日常生活に見られる多くのものが、伝統に支えられているのです。たとえば、箸を使うことでは日本も中国も同じですが、日本では箸はテーブルについている当人に對して横向きに置かれます。しかし、中国では、箸は当人から見て縦に置かれます。いずれの国にしても、たかだか箸の向きぐらいと思えることでも、實際の場では近くの人びとに違和感を与えてしまったり、他の人びとに對して礼儀を欠くと見なされてしまつたりすることになってしまいます。

食べ物について考える場合に、単に生命維持のための栄養やカロリーという面だけを見るならば、コンニャクなどはほとんど無意味です。ましてや、河豚^{ふぐ}のような猛毒を持つものなど、危険をおかしてまでも食べる必要はありません。生命維持だけを問題にする考えは、文化というものをまったく無視したものなのです。人間が何かを食べるという行為は、そうした合理性のみでは割り切れない、理不尽さ、冒險心、飽きることのない貪欲^{どんよく}さに満ちています。

人間の食べ物の特徴は、身辺から食べることが可能なものの、すなわち食べられるものからほんの一部をどのようにか選び出し、それをどのようにか入手し、どのようにか保存し、どのようにか料理し、どのようにか食べるといった、極めて文化的なものなのです。もし、人間の食べ物が、単なる生命の維持だけを目的とするものであつたとしたら、地域や集団による食べ物の文化などは無用のものであるはずです。

食べ物の伝統に関しては、さらに重要なことがあります。元来、伝統というものはそれを創り出した人物が不明であることが普通です。B、焼き芋は、日本の伝統料理ですが、誰によって始められたのかなどということは分かりません。今から、わずか二、三百年ほど前のことならば、料理の種類によつてはそれを発明した人物を特定することができるでしょう。そして、多くの場合、発明者は一人の人物です。しかし、現代では大勢の人が集まつて、共同で人為的に伝統を創り出そうという動きが目立つようになりました。

日本においては、特に第二次大戦後は、伝統創りは産業と強く結びついて来ました。その最も活発な例の一つが、いわゆる村おこし、町おこし運動です。³伝統の活用は、落ち込んだ地方経済を救うための、いわば目玉商品となります。食べ物は、当然、その種の運動の格好の売り物になりました。地元の知識人が集まつて、その土地に何か伝統として売り出せる素材はないかと探し回り、仮にその種の事物が見つかってします。たとえば、歴史に名を残す偉人が見つかったならば、その人物にあやかつて、商品となるような何らかの食べ物を創り出す計画に着手します。^注水戸黄門^{みとこうもん}が諸国漫遊の際に宿をとったなどという言い伝えが見出せれば、それが単なる伝説であることは分かつていても、黄門饅頭^{まんじゅう}、黄門煎餅^{せんべい}、黄門ビール

から、素材そのものを商品化する黄門トマト、黄門イモなどという食べ物に至るまで、様々な形で土地の産物を利用した商品として展開するといった例は、日本中あらゆるところで見ることができます。それどころか、その素材の大部分を他の土地の産物に依存するといったものまでもが、土地の伝統として売り出されることも少なくありません。

古いままの形で守られているものこそが伝統であると、多くの人は信じています。しかし、伝統はどこかが少しづつ変化してゆくからこそ、新しい時代の中で存続してゆくことができるのです。

では、伝統は、如何なる形で変化を遂げてゆくのでしょうか。まず、伝統はいくつかの構成要素から成り立っていることに注意が必要です。たとえば、その土地に代々伝えられてきた酒を例に考えてみましょう。その酒は、酒の素材、釀造方法、味、香り、色、容器、名称、その酒を取り巻く物語など、いくつかの構成要素によつて支えられています。しかし、その酒を詳しく見てみると、昔はその地域でとれた米を使つていても、現在では地域外の米を使用するものとなつていて、釀造方法もより衛生的で経済的なものに変えられるといったことが普通です。時代に即して、容器を洒落た瓶にするといったことも、よく見られます。伝統の特徴の一つは、人びとがそれに関心を持つている限り、その構成要素の一部を時代に即したものに変えるといつた形で、無限に新しい命を持ち続けることなのです。⁴

さらに、そうした形で変化を続ける一方で、何故、それが伝統として認められるのでしょうか。それは、伝統の核となる要素、つまり、その時代に生きる人びとがその伝統にとつて中心的であると見なす部分が守られているからです。

しかし、伝統の核のあり方も、時代の流れの中で変わらないわけではありません。現代のように変化の速い時代においては、わずか十年、二十年前、人びとが大切だと言つていた部分も、現在ではほとんど忘れられてしまつたものは少なくありません。たとえば、かつては、その土地の伝統の名物とされるものは、地域の産物で作られていることが当たり前のように思われていましたが、現在では、素材が地域産であることは稀なことかもしれません。むしろ、こうした素材の内容よりは、商品の包装や名称で地域らしさや伝統を演出することが当たり前になりました。このように見て行くと、伝統とは、人間が生きて行く際の拠り所であると同時に、何かを追い求める人間の想像力が創り上げた、ある種の物語であることに気づきます。⁵

三十年ほど前に、わたしなりの伝統の考え方を未来を懐かしむというタイトルで文章にして書いたことがありました。⁶ それは、伝統について一般的に言われるようなこととは全く異なるものなので、多くの人が違和感を抱く発言であったようです。伝統は過去から現在までという考え方が、人びとの頭に浸み込んでいるからでしょう。

しかし、わたしの考えでは、伝統とは、何か行動を起こす時に、無意識に頼つてしまふ拠り所なのです。

すなわち、それは過ぎ去つた過去の事実ではなくて、人びとの中に息づき、その未来に向けた行動を支えるものであるとも言えるのです。

そもそも伝統を省みるということは、まず未来に向けて何らかの行動を起こそうとしているからです。

そして、そこに過去を活かそうとする試みだということが出来るでしょう。だからこそ、わたしは未来を懐かしむという表現を使つたのでした。

ごく当然のこととして何かを食べる。その未来にかけて起こされる行動の中にこそ、伝統は生きていると言えそうです。

(西江 雅之「食べる」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 目玉商品＝特に宣伝して売り出す商品。

水戸黄門^{とくがわみづくに}、徳川光圀^{とくがわみづくに}。水戸藩の二代藩主。(一六二一八〇一七〇〇)

(ア) 本文中の □A・□B に入る語の組み合わせとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 A もしくは B しかし 2 A しかも B たしかに
3 A すなわち B つまり 4 A あるいは B たとえば

(イ) —線1「ごく普通の日常生活に見られる多くのものが、伝統に支えられている」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 箸の置き方の例でも分かるように、伝統は人びとが無意識のうちに過ごしている日常生活のあらゆる場面で、様々な行動や思考の基盤となつていて。

2 箸の置き方の例に見られるように、伝統は人びとの生活の日常的な場面では影響力を持つが、非日常的な年中行事などとは無縁なものとなつていて。

3 箸の置き方が文化によって異なるように、伝統はその土地に根づいており、日常生活の中で人びとに常に意識され続けることで行動の規範となつていて。

4 箸の置き方が同じ文化の中でも変わっていくように、伝統は人びとの日常生活の中から生み出されるので、必然的に変化し続けるものとなつていて。

(ウ) —線2「極めて文化的なもの」とあるが、筆者が人間の食べ物をそのようなものと考へる理由として最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

1 食べるということが栄養摂取を目的としながらも、地域や集団によって素材の選び方、調理方法、食習慣などが違うので、皆同じように生活していくのは難しいと考えているから。

2 人間が何かを食べるということは、生命の維持だけが目的なのではなく、食材への興味や調理への探究心といった食べるまでの過程を含めた一つの行為であると考えているから。

3 食べるということだけであれば、どんな動物でも同じ喜びを感じることはできるが、人間はそれに加えて何とか工夫して食べようとするところに喜びを見出すと考えているから。

4 人間が何かを食べるということについては、生命の維持という本来の目的に意味はなく、危険をおかげして食べるその意欲の高さがその土地の文化の高さに表れると言っているから。

(エ) —線3「伝統の活用」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次のなかから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 その町や村に昔から伝わる伝統産業を再び活発にすることで、その土地の伝統をしっかりと守りながら、地方経済を活性化させること。
2 伝統的な素材に脚光をあて、昔を懐かしむ人びとの感情に訴えてその土地の産物を売り出すことで、地方経済を活性化させること。

- 3 その土地で売り出せる素材にあやかって人為的に伝統を創り出し、それを商品として展開することで、地方経済を活性化させること。

- 4 地域の伝統を意識しながらも、他の土地の産物を利用した商品を広く売り出すことで、日本中の地方経済を活性化させること。

(オ)

——線4「無限に新しい命を持ち続ける」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の
中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 伝統は、実体を持たず人びとの意識の中に存在しているものなので、外観の変化に左右されることなく継続していくこと。

- 2 伝統は、人びとの関心に支えられながら、どこかが少しづつ新しいものに変化していくことによつて継承されていくこと。

- 3 伝統は、その中に新しいものを次々に取り込むことで古いものを捨て去り、まったく新しい姿を生み出し続けていくこと。

- 4 伝統は、素材や製造方法などの外形的変化と伝統を支える人びとの内面的変化が相互に作用して受け継がれていくこと。

(カ) ——線5「伝統とは、人間が生きて行く際の拠り所であると同時に、何かを追い求める人間の想像力が創り上げた、ある種の物語である」とあるが、それを説明した次の文章中の□I・□IIに入れるものとして最も適するものを、□Iは二字の語で、□IIは四字の語句で本文中からそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

人びとが日常生活で何らかの行動をとるときには、その人に浸み込んだ□Iを支えとしている。その行動の□Iとなつているのが多くの文化項目を支えている伝統である。そして、その伝統の構成要素は時代に即して変化し、さらには、□IIまでも時代の流れの中で変わっていくものであることから、伝統は古いままの形で守られるものではなく、人間が何かを追い求める心によって変わり続ける、想像力の産物であるということ。

(キ) ——線6「わたしなりの伝統の考え方を未来を懐かしむというタイトルで文章にして書いたことがありました。」とあるが、筆者が「未来を懐かしむ」と書いたのは、「伝統」をどのようなものと考えているからか。次の①～③の条件を満たし、全体で三十五字以上四十五字以内の一文で書きなさい。

- ① 書き出しの「伝統」とは、という語句に続けて書き、文末は「と考えているから。」で終わること。これらも全体の字数に入れること。
- ② 「過去」「未来」という二つの語を、いずれも用いること。
- ③ 読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書くこと。（解答欄の行末のマス目には文字と読点などを一緒に置かず、読点などは次の行頭の一マス目に書くこと。）

(ヶ) 国語の授業の中で、生徒たちがいくつかのグループをつくり、本文を読んだうえでその内容について話し合った。次の1～4は、あるグループでそのときに出された意見の一部である。筆者が本文中で述べている内容と合っていないものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「伝統」というとすぐに高級なものを思い浮かべてしまうけれど、実は普段自分たちが意識せずに使つたり食べたりしていた箸や焼き芋のようなものも伝統に支えられていたんだね。」
- 2 「土地の名物といえば当然その土地の産物で作られていると思つていたけれど、今では包装や名称などの外見で地域らしさが演出されていることが当たり前になっていたんだね。」
- 3 「伝統ということばには長い間受け継がれてきた重みのあるものという印象があつたけれど、昔から姿を変えずに受け継がれてきたものの方に価値があるのは事実だったんだね。」
- 4 「人の考え方のもとになっているものは個人的に身に付けたのだと思つていたけれど、実はその多くが自分が生まれた土地の文化の枠組みの中で身に付けられたものだつたんだね。」

問四 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

(何とか院というひとつのお院があつた)
谷中の里に、何がしの院とてひとつのお寺あり。寛永のころのことになん、將軍御鷹狩のありし時、

(徒歩であちこちとお見過ごしになればにこ覧になつていたが)
御かちにてここやかしこ御過ぎがてに御覽ましましけるが、この寺へも思ほえず渡御ありしに、折ふしそ

(注) (もう八十歳になつていて)
の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出て接ぎ木して居けるが、御供の人々遅れたてまつりて、御側に二人

(注) (高貴なお方だとは)
三人付きたてまつりしを、やんことなき御ことをば思ひよらねば、そのまま背き居たりしを、「坊主なに

(注) (ひどく無愛想に)
申し上げたところ)

申せしかば、御笑ひありて、「老僧が年にて今接ぎ木したりとも、その木の大きくなるまでの命もしれが

(注) (お答え)
たし。それにさやうに心をつくすこと不要なるぞ。」と上意ありしかば、老僧「御身は誰人なれば、かく心

(注)

なきことをきこゆるものかな。よく思つて見たまへ。今この木ども接ぎておきなば、後住の代に至りてい

(注) (必ずしも)
づれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の為を思つてすることなり。あなたがちに

(注)

私一代に限るべきことではないのです)

(注)

我一代に限るべきことかは。」と言ひしをきこしめして、「老僧が申すこそ実も理なれ。」と御感ありけり。

(注)

その程に御供の人々おひおひ来りつつ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧それに心得て、大きにおそ

(注)

れて奥へ逃げ入りしを、御召し出しありて物など賜りけるとなん。

(注)

今、翁もこの老僧が接ぎ木するごとく、老い朽ちぬれども、ある限りは旧学をきはめて、人にも伝へ、

(注)

書にも残して、後世に至りて正学の開くる端にもなり、この道のために万一一の助けともなりなば、翁死

(注)

にても猶生けるがごとし。古人のいはゆる死しても骨朽ちじと言ひしこそ、思ひあたりはべれ。

(注)

(「駿台雑話」から。)

(注) 谷中＝現在の東京都台東区の一部。

寛永＝江戸時代の年号。一六二四～一六四四年。

鷹狩＝飼い慣らした鷹を使って鳥や小きいけものを捕らえる狩猟。

住僧＝その寺の住職。あととの「坊主」「老僧」も同じ人物。

接ぎ木＝成長を促すために、枝や芽などを他の木につぐこと。

後住＝後の代の住職。

翁＝老人。ここでは、語り手の自称。

旧学＝長期間続けてきた学問。

(ア)

（）線部の主語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 将軍 2 住僧 3 御供の人々 4 翁

(イ) 一線1 「御身は誰人なれば、かく心なきことをきこゆるものかな。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 あなたはどのような人であるので、このような思慮ないことを私に聞かせるのですか。
2 あなたはどのような人であるので、このように心に思つてもいいことを私に聞かせるのですか。
3 あなたは私をだれだと思って、このように思ひやりのないことを私に聞かせるのですか。
4 あなたは私をだれだと思って、このような風情のないことを私に聞かせるのですか。

(ウ) 一線2 「私は寺の為を思うてすることなり。」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「住僧」は、寺を立派にするためには何をすればよいかを、この先寺を継いでいく者たちに知らせるために接ぎ木をしているということ。
2 「住僧」は、やがてこの木々が大きく育ったとき、それを材料にもつと立派な寺を建ててもらうよう祈つて接ぎ木をしているということ。

3 「住僧」は、このままだと樹木が寺を覆つて見苦しいことになり、きっと後の代の者が困つてしまふから接ぎ木をしているということ。
4 「住僧」は、自分が生きている間だけを考えてのことではなく、後世にこの寺がますます立派になるのを願つて接ぎ木をしているということ。

(エ) 一線3 「逃げ入りし」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「将軍」と知つたうえで反発したものの、大勢の「御供の人々」に取り囲まれておそろしくなったから。
2 自分が言いたいことは全部言つてしまつたので、「将軍」が怒り出す前に姿を消そうと思ったから。
3 そつけなく応対していた相手が「将軍」だったと気付き、大変おそれ多いことをしたと思ったから。
4 自分の発言が思いがけず「将軍」にほめられ、ほうびまでくれるというので恥ずかしくなつたから。

(オ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「将軍」は珍しい接ぎ木をしている寺があると聞いて鷹狩のついでに立ち寄ると、確かにおもしろい接ぎ木の様子だったので、興味を抑えられず「住僧」に声をかけた。
2 「住僧」は接ぎ木をしているのを怪しい行動だと見とがめられることをおそれたために、声をかけられたとき、わざと「将軍」だと気付かないふりをして背を向けていた。
3 「御供の人々」は二、三人を除いて「将軍」に遅れていたが、「将軍」に失礼なふるまいをして逃げ出した「住僧」に追いついて召し捕り、「将軍」に差し出すことができた。
4 「翁」は「住僧」の接ぎ木の話から、自分も長く続けてきた学問を書物に残すなどして後の世の役に立つならば、自分は死んでも生き続けているようなものだと考えた。

（問題は、これで終わりです。）

II 国語 解答用紙

(平成二十四年度)

学科名

科

受検番号

番
氏
名

問一

計

(ウ)	(イ)	(ア)		
(イ)	3	1	3	1

(ウ)	(イ)	(ア)		
(イ)	4	2	4	2

各一点
(ア) 一點、
(イ) 二点
(ウ) 二点
(エ) 二点
(オ) 二点
(カ) 二点
(ヲ) 二点
(ハ) 二点
(ヲ) 二点
(ル) 二点
(ル) 二点

問二

(カ)	(ア)			
(イ)				

問三

(ク)	(ヰ)	(カ)	(ア)	

35

各二点、(カ)は両方できて正解 45

問四

(ア)				
(イ)				

各二点

四	三	二	一	問
				得 点



国語

正答表並びに採点基準

(平成二十四年度)

問一

(ウ)	(イ)	(ア)
(i)	3	1
(ii)		
(iii)		
3		
負	快	き
担	晴	かん
		さんたん
4	2	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	
3	2	
4	3	
2	4	
1	1	
1	2	
2	3	
3	1	
4	2	
2	1	
1	1	

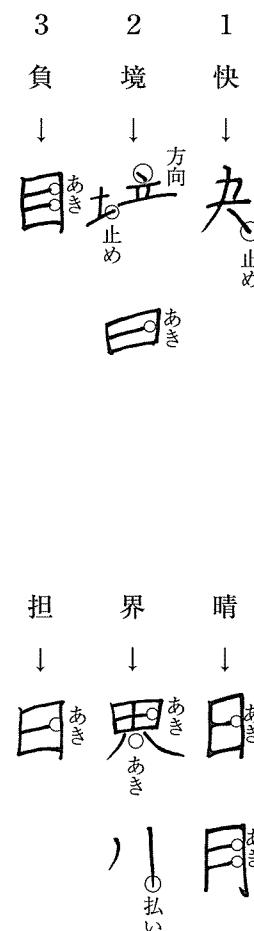
採点上の注意

問一 (イ)について

- ① 字体については、昭和五十六年十月一日内閣告示第一号『常用漢字表』による。あとに、それに基づく許容例を示す。『常用漢字表』は、以下の文化庁ホームページからダウンロードできる。

<http://www.bunka.go.jp>

許容例



【抜き出し問題について】

- ② 疑問点は複数の採点者によつて判断し、校内で統一すること。

- ② 疑問点は複数の採点者によつて判断し、校内で統一すること。

【記述問題について】

- ① 正答例以外の文であつても、与えられた条件をすべて満たし、問題の趣旨に即した文ならば正答とすること。
② 完全正答とし、内容についての中間点を設けないこと。誤字・脱字についても減点対象とはせず、誤答とすること。
③ 疑問点は複数の採点者によつて判断し、校内で統一すること。

問三 (キ)について

正答例

伝統とは、

過去の事実ではなく未来に向けた行動を起こす時の拠り所となる人びとが無意識に頼る拠り所として過去を未来に活かそうとする過去を活かして、未来に向けた行動を無意識に支えるものと考えているから。

35

45